

富山市立図書館

図書館だより

第55号
2012.12

平成24年度富山市立図書館協議会

平成24年10月25日、平成24年度富山市立図書館協議会^(※1)が開催されました。

図書館側から昨年度の事業実績や本年度の主要事業、新図書館整備の経過、また平成25年3月、C i Cビル4階に開館予定の「(仮称)こども図書館」などについて説明を行ったところ、各委員から次のような質問や意見が出されました。

主な質疑応答

(質問)

こども図書館について、小さい子供連れには公共交通は利用しにくく、車は駐車料金が高いが、利用者は集まるのか。

(回答)

併設となる子育て支援センターでは駐車料金の補助も検討していると聞いている。市としては公共交通の利便性を高め、利用促進をすすめている。子育て支援センターとも連携し、考えていきたい。

(意見)

こども図書館について、子育て支援から考えるとインターンシップや大学などのボランティアとの連携も視野にいらてはどうか。

(意見)

新しい本館に向けて、蔵書管理にICチップを

活用すると貸出の操作が簡単で便利になるため、窓口業務が委託となる場合が多いが、図書館としての根幹の業務は直営の司書を配置してもらいたい。

(意見)

こども図書館の運営が業務委託になっても、富山市立図書館が培ってきた児童サービスが途切れないようにしてほしい。マンガやしかけ絵本を置くのもこれまでの図書館の概念ではなかったが、C i Cも場所がら、親子や子どもひとりで行くには適さない面もあるので、それなりの仕掛けをしていかないと利用者は少ないと思う。

(回答)

マンガを置くのは試験的であり、他の図書館におくことは考えていない。しかけ絵本やさわる絵本なども子育て支援センターの乳幼児が利用できるものを用意することが目的である。



※1 富山市立図書館条例に基づき、図書館の運営に関し、館長の諮問に応じたり、図書館奉仕について館長に意見を述べるため、図書館協議会が設置されています。(根拠法令は図書館法16条による)

(質問)

新図書館の床面積は現在より広がるのか。

(回答)

まだ数字的にははっきり決定していないが、現在よりは拡充すると考えている。

(質問)

新図書館について、にぎわいと騒々しさは違う。美術館^{※2}と図書館の静寂性はつながるところも多いが、吹き抜けを中心に両施設を結ぶと美術館側の企画によっては、うるさいこともあるのではないか。

(回答)

吹き抜けは音が聞こえるのは確かである。静寂性を望まれる方のために扉がついた閲覧席なども考えている。

(意見)

図書館の専門性を生かすときは入館者全体を多くしないといけない。気軽に通ってくれる人が増えることで、専門性も発揮でき、レファレンスの件数も増えてくる。

新しい取組みについても、今後はいろんな意味でスタンスを広げていけばよい。学生もマンガから入って興味をもって専門書を読む場合もある。現在は大学でも教養主義だけに凝り固まらないよう柔軟に教育を考えている。これからは、好ましくないと思っていることも許容する力が必要である。

また、新本館が入る建物には銀行もあるが、銀行も地域社会と一緒にやっっていこうという考えをもっているだろうから、イベントなど銀行と市セクションとが業務提携できることがないか考えていくことも必要ではないか。「持続可能性」と「地域貢献」という共通キーワードを考えて協力していくことが必要である。

蔵書についてもただ多く所蔵していても意味がないので、いつまでも抱え込まず在庫整理、棚卸

も必要で、求められている最新のものを残していく必要がある。

(質問)

新図書館について、美術館と図書館との仕切りはあるのか。それともオープンなのか。

(回答)

図書館側はオープンであるが、美術館側は有料ゾーンもあるので仕切りはあると思う。ブラウジングパサージュ^{※3}は共有部分であり、閲覧席を設けてあり自由に移動できる。図書の持ち出しはICチップを活用して最終出入口ゲートで確認できるようにしていくことを考えている。

(質問)

新図書館には駐車スペースはあるのか。

(回答)

図書館、美術館、銀行、公益施設など全体としてどうするか検討中である。

(質問)

メールレファレンスサービスは誰でも利用できるのか。また、内容はどんなことが多いのか。

(回答)

ホームページから誰でも利用でき、内容は富山県歴史や風習に関することが多い。県外からの問い合わせも多い。

(意見)

現在、本館1階で岩倉政治の展示を行っているが、今後も中高年が興味を引かれる富山らしいテーマのものを実施して欲しい。

(意見)

図書館の基本的な理想である、利用したいときにいつもそこにある、細くて長いというスタンスを守りつつ、新しいことも取り入れる方向で飛躍してほしい。

(本館 水野)

※2 新図書館が設置される「西町南地区公益施設」には、ガラス美術館や富山第一銀行が入る予定です。

※3 「西町南地区公益施設」計画で使用している造語。ブラウジングは、拾い読み、閲覧の意で、パサージュは、通り道、小径を意味します。施設の中心に吹き抜けを設け、その周囲に各フロアの共用機能（多目的スペースや情報コーナーなど）を配置する空間を指します。

詳しくは、富山市ホームページより「西町南地区公益施設（ガラス美術館・図書館本館）の概要について」(<http://www.city.toyama.toyama.jp/data/open/cnt/3/4177/1/2409NISHITYOU.pdf>)に掲載されています。

知性とユーモアの作家・丸谷才一

今年、作家の丸谷才一氏が逝去されました。小説『笹まくら』（河出書房新社 1966）をはじめとして、『たった一人の反乱』（講談社 1972）や、『輝く日の宮』（講談社 2003）などの話題作を世に送り出しました。

丸谷氏の活動は多彩で、改訳を重ねたジェイムズ・ジョイスの『若い芸術家の肖像』で知られる翻訳の仕事や、随筆、評論などがあります。

今回は近年発表された作品を中心にその活動の一端を紹介したいと思います。



『持ち重りする薔薇の花』
新潮社 2011

最後の長編小説となったこの作品は、若い音楽家たちが結成したカルテットを題材にしています。カルテットとは、バイオリン2台とビオラ、チェロで構成される弦楽四重奏団で、丸谷氏は、「(クラシック音楽の) 基本といふか、精髓といふか、要約といふか、本質みたいなものとしてクワルテットといふ形式がある」とエッセイ^(※1)にも記しています。

演奏には楽団員同士の深い調和が求められますが、それだけに私生活の面ではギクシャクしがちのようで、作中の「ブルー・フジ・クワルテット」のメンバーも例外ではありません。プライドのぶつかり合いや、メンバー内でもつれる男女関係の機微が、時にユーモアを交えつつ、さらりと描かれます。

丸谷氏は2011年のインタビュー^(※2)で「ぼくは成熟した市民の楽しみとしてあるイギリス的な小説を目指しています。長編小説というものは、成熟した知的な中流階層あって成立する。それを具現し

ていたイギリス文学の呼吸を学び、身につけていたから、漱石は中流階層が成熟していなかった日本で例外的にすぐれた長編小説を書けたのだと思います。」と語っています。

丸谷氏の小説は、社会風俗を精緻に観察し、その中に教養やユーモア、人生の哀歓が織り交ぜられ描かれています。氏の目指していた「イギリス的な小説」という形が、晩年に執筆されたこの作品にも息づいていることが感じられます。

さて、丸谷氏の没後、親交の深かったエッセイストの湯川豊氏が「丸谷さんが好きだったもの」^(※3)と題した文章を発表しています。そこでは氏の好きなものとしてゴシップ（噂話）があり、長年雑誌などに連載したエッセイは、「ゴシップの集積という観があった」と綴られています。



『人魚はア・カペラで歌ふ』
文藝春秋 2012

「オール讀物」でのコラムをまとめたこの作品はその一つで、古今東西のあらゆる書物や事象に精通した丸谷氏ならではの知識が、縦横無尽に発揮されています。しかしながら語り口は明るく、氏のこだわりやユーモアが随所に顔を覗かせます。

丸谷氏の残した仕事はこのほかにも、日本文学に関する論考や、毎日新聞などの書評欄を手がけるなど、数多くあります。死ぬまで現役作家として書き続けていたいと口にしていたという丸谷氏。氏の残した広く豊穡な世界を、美酒を舐めるように少しずつ味わっていきたいものです。

(本館 沖)

※1 雑誌「ku:nel」(マガジンハウス) 2012年3月号掲載「クワルテットを聴かう」

※2 朝日新聞 2011年8月30日夕刊 「時の回廊」丸谷才一「たった一人の反乱」—純文学の戒律にあらがう

※3 雑誌「文藝春秋」2012年12月号掲載「丸谷さんが好きだったもの」湯川 豊

レファレンスあれこれ

Q. 昔、八尾では、正月に自宅の天神様の前で「天神経（てんじんきょう）」というものを唱えたということを聞いたが、どのようなものだったか知りたい。

A. 図書館には、各地の習俗やならわしに関する質問が多く寄せられる。今回は、富山のお正月に関するレファレンスを紹介する。

はじめに、民俗、宗教、歴史等の事典を調べてみる。『日本民俗大辞典』（吉川弘文館 2000）「天神信仰」の項には、菅原道真の霊をまつる信仰であることやその歴史的背景に加え、「石川・富山を中心に北陸地方でみられる信仰。富山県では天神様は正月神とされている。」との記述がある。『日本の神仏の辞典』（大修館書店 2001）には、「江戸時代には庶民の教育機関の寺子屋を中心に信仰が広まり、「天神経」が読誦された。」と記し「天神経」について若干触れている。また『菅原道真事典』（勉誠出版 2004）を確認したが、「天神経」の記述は見当たらなかった。

次に、郷土資料を調べてみる。『富山大百科事典』（北日本新聞社 1994）では、天神信仰のあらましから北陸での普及経緯を記している。「天神絵像・木像を祀るのは、北陸では富山・石川県が多い。・・・天神習俗（天神経、うそかえ神事、正月の天神様飾り付けなど）の盛んなことが窺える。」とあり、富山県内の「天神経」の存在が確認できた。

『富山県史 民俗編』（富山県 1973）には詳しい記述がなかったため、視点を変え、寺子屋と天神経に関わりがあったことから『富山県史 通史編Ⅳ近世下』「学芸と教育」の章を見てみる。ここでは「寺子屋における天神信仰の表れとして、天神講・席書きや、天満宮・天神堂の建立、天神経の読誦をあげることができる。」「天神講や正月の書初めの折に「天神経」を読誦した例を八尾町にみることができ

る。」とし、『富山史壇 78号』前田英雄氏論文を紹介している。この論文には「50歳以上の人々が学童のころ、どの家でも天神様を飾った祭壇の前で「天神経」をあげそれから書初を書いたという。」と述べ、八尾町富士原氏が所蔵する「天神経」の経文が記されていた。

さらに、地元八尾の資料を調べてみる。『続八尾町史』（八尾町 1973）付録部分に、「天神経」が記されており、経文とひらがなの読み、解説が記されている。これには『富山県古楽民謡採録採譜事業中間報告その1』（富山県 1972）によるとの注がついていたが、この資料には「天神経」部分は省略されていた。

そこで、この事業を1冊にまとめた『富山県の民謡』（北日本新聞社 1979）を見てみる。この資料は、富山の民謡をはじめ、わらべ唄なども幅広く集め、県下の伝承歌を確認するには大変役立つ基本図書である。ここでは、明治27年生まれの方から採録した「天神経」が記録されており、楽譜も付けられていた。解説には「正月二日には、子供たちが朝早く起きて、天神の前で書初をして、字の上達を祝う。これを「トシトク」と言い、その際に家族みんなが集まって、八尾独特の「天神経」を読む。これは経文であり、子供たちに意味がわかるはずもないが、祖先からずっと暗唱で伝えられてきているものだ。」とあった。

このほかに、青柳正美著『学芸の神 菅原道真 天神信仰と富山』（北日本新聞社 1986）には、「天神経」の本文をはじめ、八尾に伝わる経文も記録されていた。また、八尾町出身の成瀬昌示著『越中八尾細杷』（言叢社 1993）には、自身の体験を交えた「天神経」の解説が記され、興味深く読むことができる。

（八尾ほんの森 田中）